後ろの正面4

佐藤 秀俊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
後ろの正面４

【Ｎコード】
Ｎ９４３４Ｙ

【作者名】
佐藤　秀俊

【あらすじ】
後ろの正面第４話。主人公が自分について考え出す

正一は高校生だった。

通っていれば今は3年生だろうか？

いつの頃からか人からの視線が気になるようになって行った。

「あの子運動神経全くないんだよ。」

正一は足が遅い。

「あの子勉強出来ないんだよ。」

正一は学校すら興味がない。

「あの子は協調性がない。」

正一は人見知りで、話し下手だ。

でもそれは個性だと思っていた。

コミュニケーションは必要があればとればいいと思っていた。

でも学校すら興味がない正一はコミュニケーションをとる理由がなかった。

これからの将来のことはぼんやり考えていた。

どこでもいいから仕事して、話しをせずに生きれればよかった。

正一が人見知りなのには理由があった。
他人の話を聞いているとわけがわからなくなるのだ。
先生のこと、部活のこと、バイトのこと、恋愛のこと。
全部やらなくてもいいことなのに一喜一憂する周りに共感出来なかった。
他人はどうにも出来ないと解っていたのだ。
それでも他人に興味を抱く他人たち。
正一には理解出来なかったのだ。
「だからかぁ。。。」
正一はつぶやいた。人の気持ちがわかるようになったのは何故かを考えていたからだ。
正一の疑問は、何故周りの人はこんなに他人のことを考えているのだろう？ということだった。
他人への興味といえばそれだったのだ。
他人がどう自分を見ているのか？
他人はどう他人を見ているのか？
他人はどう自身を見ているのか？

正一にとってどうでもいいことを頑張る人々が疑問でしかなかった。

現状で言えば、点滴と胃洗浄の気持ち悪さだけが正一の命を支えていると思っているのだ。

正一にとって絶対なものは物質で、精神ではなかった。

正一にとって絶対なものは行動で、気持ちではなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9434y/

後ろの正面4

2011年11月28日04時15分発行